

美しさへの満足感と女性の加齢意識を考える

～ 足るを知るものはよりよく生きるなり～

鈴木 靖子

1 問題

近年、「いつまでも健康で長生きしたい」、「若さを保ちたい」と謳ったさまざまな商品が数多く販売されている。2008 年では 65 歳以上の人口が 22%を占める(総務省統計局)高齢社会の中で、日本人の平均寿命は男性では 79.19 歳、女性は 85.99 歳(2007 年現在 厚生労働省)となり、心身ともに充実している現役世代以降の時間が長期化している。それゆえに、この時期をどう生きていくのかが大きな課題となり、加齢による身体変化にどう適応するのかが求められるのであろう。その一方で、この年代の人々に、「いつまでも健康でいること」、「若々しい身体を維持すること」、加えて女性の場合は「きれいであること」を過度に強要している感も否めない。鈴木(2006)は「出産をしても 40 歳を過ぎてもキレイな人が増えており、雑誌やテレビもこぞってキレイになる特集を組む現状」があり、「女性たちが『見た目』にこだわり、『キレイ』を目指し続けなければならないような文化的状況が存在している」と著書の中で述べている。きれいであることを目指す理由は諸説あり、心理学的要因では、外見的な魅力を上昇させたり、理想的な外見を獲得することで安心感が生まれ、自信や満足感、積極性を高めて社会的適応や心理的安定感を促す(松井 1993、大坊 1996、余語ら 1990 など)として化粧の心理的効果を示している。このように化粧が自己の維持や心身の健康に重要な役割を果たしている反面、化粧による自己満足感は 30 代後半でピークとなるが 40 代以降では化粧は習慣性のものというイメージが強くなり(永尾 1983)、さらに施した化粧が役割や状況に見合っていなかったり他者からネガティブな評価を受けると、化粧による満足感や自信が低下する(余語 1996)。美しく装ったにもかかわらず、他者からの評価で快感情が失われ不安が強まることもあるものの、美しくありたいと思う背景には自分の満足や自信につながるという理由が大きいのであろう。

満足感について、大坊は、「欲求が充足されて不平のない状態で生じる感情のひとつで、喜び、幸福感、快感情を伴う。期待と結果の整合により、自尊心維持や向上を促す(社会心理学小辞典 1994)。」と定義している。「このようになりたい」という自分の欲求が満たされて、その上「こうありたいと思う自分にできるだけ近づく」状態のときに満足感が得られるのであろう。従って、「このようになりたいと願う」期待の大きさと「なりたい状況にどれだけ近づいたのか」という目標と現実の隔たりが満足感の程度に関与すると考える。この期待と結果の整合の観点からみると、きれいであることの満足感が得られる状況とは、例えば、ジムでフィットネスに励み減量して素敵な衣装が似合うようになった、美白効果

の高い高級化粧品を使ったところ透明感のあるきめ細やかな肌になった、美容外科で目鼻立ちを整えたらメリハリがあり活気のある表情になったなどが考えられる。どれだけフィットネスに励んだり、高級化粧品を使ったとしても、それで望み通りの効果が得られなければ満足感を得られないであろう。一方フィットネスの代わりに歩いて通勤し、代替の化粧品を使って効果が上がれば大いに満足できると考える。また、同じ化粧品を使ったとき、その効果が微細であっても変化に満足できる場合と、商品広告に示されるような顕著な効果が自身に認められなければ満足できない場合があるのではないか。従って、目標と現実が見合っていれば、満足感を得られるであろう。また、こうなりたい状況が広範囲で多岐にわたるにもかかわらず、現実が乏しければ、かけた期待の大きさとは無関係に不満を抱くと思われる。

老子が説いた「知足者富 強行者志有：足ることを知るものは富めり。強めて行う者は志有り(道徳経二十三章)」は「もっているだけのもので満足することを知るのが富んでいることである。自分を励まして行動するものがその志すところを得る」と解釈される(小川 2009)。また道元は八大人覺の第二として「知足」を挙げ、今までに得たことに満足して心安らかに生きることと説いている(境野 2008)。

鈴木(2006)が示すように、女性がきれいであることを目指し続けなければならないような文化的状況下では、女性は若さを追い続けることを強いられるであろう。そして加齢とともに若さを保つことが難しくなると、現状を否定的に捉える傾向があると考えられる。社会的には若さが重視されていても、人としての円熟した美しさに魅力や価値を見出すことができれば、若さ偏重傾向に迎合することなく、今ある状態に満足して、加齢を前向きに捉えることができると考える。そこで以下のような仮説に基づき分析を行なう。

仮説 1 現状を肯定するほど満足感が高い。

仮説 2 現状肯定感が高い方が加齢を前向きに捉える。

本章では、美しさに関する意識調査の結果について、これらの仮説を検証し、女性の加齢への認識と満足感との関連を明らかにする。

2 方法

2.1 分析対象とした変数の特性と単純集計結果

本章で分析対象としたのは、「きれいな女性」のイメージ、日常生活で目指している「きれいな女性」のイメージ、きれいな女性でいることへの満足度、1ヶ月の美容投資金額、加齢に対する気持ち、加齢の受容、加齢と若さ、アンチエイジング対策、加齢ときれいさの関連の9項目である。各項目への回答選択比率は以下の通りである。

「きれいな女性」のイメージは、さまざまなイメージについて回答者が「きれいな女性」のイメージとして選択したもの(複数回答)である。イメージの内容と選択された比率は、顔のつくり(目鼻立ち)がきれい 62.4%、個性的な魅力のある顔立ち 28.9%、きめが細か

肌 61.0%、潤いのある肌 56.6%、ハリのある肌 54.4%、色白の肌 41.9%、センスのよいメイクをしている 58.9%、個性を活かしたメイクをしている 23.3%、流行を取り入れたメイクをしている 11.9%、スタイル(体型)のバランスがよい 13.7%、スリムなボディ 32.2%、グラマラスなボディ 12.5%、姿勢がよい 80.1%、センスのよいファッションをしている 71.8%、個性を活かしたファッションをしている 32.7%、流行を取り入れたファッションをしている 17.6%、清潔感がある 80.5%、健康そうである 56.4%、しぐさや立ち振る舞いがきれい 80.9%、きちんとしたマナーをもっている 82.0%、言葉遣いがよい 71.8%、表情が豊か 56.2%、大人っぽい雰囲気 34.4%、若々しい雰囲気 34.8%、品がある 78.6%、パワフルである 13.7%である。

日常生活で目指している「きれいな女性」のイメージは、さまざまなイメージについて回答者が日常生活で目指している「きれいな女性」のイメージとして選択したもの(複数回答)である。イメージの内容と選択された比率は、顔のつくり(目鼻立ち)がきれい 16.8%、個性的な魅力のある顔立ち 9.3%、きめが細かい肌 35.0%、潤いのある肌 42.5%、ハリのある肌 39.1%、色白の肌 28.5%、センスのよいメイクをしている 37.0%、個性を活かしたメイクをしている 12.8%、流行を取り入れたメイクをしている 5.2%、スタイル(体型)のバランスがよい 48.3%、スリムなボディ 22.0%、グラマラスなボディ 5.4%、姿勢がよい 61.3%、センスのよいファッションをしている 49.7%、個性を活かしたファッションをしている 19.3%、流行を取り入れたファッションをしている 9.6%、清潔感がある 68.6%、健康そうである 47.2%、しぐさや立ち振る舞いがきれい 61.0%、きちんとしたマナーをもっている 73.4%、言葉遣いがよい 58.5%、表情が豊か 45.5%、大人っぽい雰囲気 17.6%、若々しい雰囲気 36.5%、品がある 56.0%、パワフルである 12.2%である。

きれいな女性でいることへの満足度は、「きれいな女性」でいるということにどの程度満足しているか回答選択肢の一つを選択したものである。回答選択肢と選択比率は、とても満足している 1.6%、やや満足している 22.8%、どちらともいえない 38.6%、あまり満足していない 29.0%、全く満足していない 8.0%である。

1ヶ月の美容投資金額は、スキンケア、メイクアップ、エステ、サプリメント、健康食品など美容トータルに費やす一ヶ月平均の金額を回答選択肢から選択したものである。回答選択肢と選択比率は、1000円未満 10.5%、1000円～3000円未満 20.0%、3000～5000円未満 23.1%、5000円～7000円未満 13.8%、7000円～10000円未満 11.4%、10000円～15000円未満 9.0%、15000～20000円未満 4.1%、20000円～30000円未満 2.8%、30000円～50000円未満 1.4%、50000円以上 0.6%、わからない 3.2%である。

加齢に対する気持ちは、加齢に対する気持ちで回答者が最も近いと思う回答選択肢一つを選択したものである。回答選択肢と選択比率は、自然なこと 35.9%、仕方がないこと 23.0%、焦りを感じる 6.0%、抵抗感があること 4.5%、避けたいこと 10.6%、うれしいこと 0.2%、未知の領域として切りひらきたいこと 2.8%、人間としての幅や深みが増すこと 15.6%、その他 0.5%、わからない 0.7%である。

加齢の受容は、きれいな女性としての加齢について回答者が最も近いと思う回答選択肢一つを選択したものである。回答選択肢と選択比率は、自然なこととして受け入れ、気にしない方だ 17.6%、どちらかという自然なこととして受け入れ、気にしない方だ 50.2%、どちらかという抵抗感があり、避けたいほうと思う方だ 27.1%、抵抗感があり、避けたいと思う方だ 5.1%である。

加齢と若さは、きれいな女性としての年齢の重ね方について回答者が最も近いと思う回答選択肢一つを選択したものである。回答選択肢と選択比率は、積極的に若さにこだわり年を重ねていきたい 9.5%、できるだけ若さを保ち、年を重ねていきたい 73.8%、若さにこだわらず、年を重ねていきたい 16.7%である。

アンチエイジング対策は、きれいな女性になるためのアンチエイジングへの考えについて回答者が最も近いと思う回答選択肢一つを選択したものである。回答選択肢と選択比率は、積極的にアンチエイジング対策をしたいと思う 21.4%、ややアンチエイジング対策をしたいと思う 51.5%、それほどアンチエイジング対策をしたいと思わない 22.3%、アンチエイジング対策をしたいと思わない 4.8%である。

加齢ときれいさの関連は、ミドルエイジからの加齢と外見のきれいさの結びつきについて回答者が最も近いと思う回答選択肢一つを選択したものである。回答選択肢と選択比率は、加齢とともにきれいさは失われていき、避けられないことである 5.1%、加齢とともにきれいさは失われていくが、努力やケアでその進行を遅らせることができる 47.7%、きれいさが失われていくことは加齢だけではないのでどちらともいえない 30.1%、努力やケアで美しさは保てるので加齢ときれいさはあまり関係ない 8.0%、加齢ときれいさを結び付けでは考えない 8.6%、その他 0.6%である。

2.2 分析項目の作成

本章の分析に際して、2.1 で分析対象とした項目について以下のように変数を作成した。

1) 満足度

きれいな女性でいることへの満足度の回答は、「とても満足している」「やや満足している」「どちらともいえない」「あまり満足していない」「全く満足していない」から一つを選択するもので、調査票では「とても満足している」を「1」、「全く満足していない」を「5」として1 - 5の値を割り当てている。その回答を、「とても満足している」=5点、「やや満足している」=4点、「どちらともいえない」=3点、「あまり満足していない」=2点、「全く満足していない」=1点として得点化した。

2) 加齢受容肯定度

加齢の受容に関する設問への回答は、「自然なこととして受け入れ、気にしない方だ」「どちらかという自然なこととして受け入れ、気にしない方だ」「どちらかという抵抗感があり、避けたいと思う方だ」「抵抗感があり、避けたいと思う方だ」から一つを選択するも

ので、調査票では「自然なこととして受け入れ、気にしない方だ」を「1」、「抵抗感があり、避けたいと思う方だ」を「4」として1-4の値を割り当てている。その回答を、「自然なこととして受け入れ、気にしない方だ」=4点、「どちらかという自然なこととして受け入れ、気にしない方だ」=3点、「どちらかという抵抗感があり、避けたいと思う方だ」=2点、「抵抗感があり、避けたいと思う方だ」=1点として得点化し、加齢受容肯定度を測定する項目とした。

3) 若さへのこだわり度

加齢と若さに関する設問への回答は、「積極的に若さにこだわり年を重ねていきたい」「できるだけ若さを保ち、年を重ねていきたい」「若さにこだわらず、年を重ねていきたい」から一つを選択するもので、調査票では「積極的に若さにこだわり年を重ねていきたい」を「1」、「若さにこだわらず、年を重ねていきたい」を「3」として1-3の値を割り当てている。その回答を、「積極的に若さにこだわり年を重ねていきたい」=3点、「できるだけ若さを保ち、年を重ねていきたい」=2点、「若さにこだわらず、年を重ねていきたい」=1点として得点化し、若さへのこだわり度を測定する項目とした。

4) アンチエイジング実践度

アンチエイジング対策に関する設問への回答は、「積極的にアンチエイジング対策をしたいと思う」「ややアンチエイジング対策をしたいと思う」「それほどアンチエイジング対策をしたいと思わない」「アンチエイジング対策をしたいと思わない」から一つを選択するもので、調査票では「積極的にアンチエイジング対策をしたいと思う」を「1」、「アンチエイジング対策をしたいと思わない」を「4」として1-4の値を割り当てている。その回答を、「積極的にアンチエイジング対策をしたいと思う」=4点、「ややアンチエイジング対策をしたいと思う」=3点、「それほどアンチエイジング対策をしたいと思わない」=2点、「アンチエイジング対策をしたいと思わない」=1点として得点化し、アンチエイジング実践度を測定する項目とした。

5) 加齢に対する気持ち、加齢ときれいさの関連

各回答選択肢に対して、選択か非選択かの変数を作成した。

6) 期待の程度

期待の大きさを測定する変数として、1ヶ月の美容投資金額の回答数の分布より投資金額の高低で概ね同数になるよう分類した。投資金額が5000円未満の場合を低期待群(N=1340)、5000円以上の場合を高期待群(N=1079)とした。

7) 結果：目標と現実の隔たり

目標を測定する変数として、「きれいな女性」のイメージとして選択した項目の合計を「目標」得点とした。現実を測定する変数として、日常生活で目指している「きれいな女性」のイメージとして選択した項目の合計を「現実」得点とした。さらに「目標」得点と「現実」得点の差を求め、目標と現実の隔たりとみなして、その数値の平均値を算出し、平均値より低い場合を目標現実近接群(N=1473)、平均値より高い場合を目標現実離隔群(N=1002)とした。

8) 期待と結果による4つの現状認識タイプ

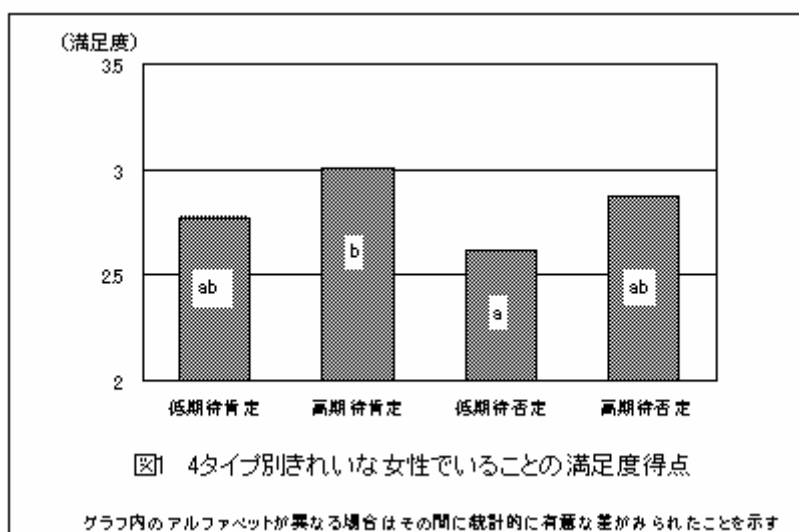
期待の程度と目標と現実の隔たりの組み合わせによる4タイプを作成した。高期待群の中で目標現実近接群を高期待現状肯定派(N=678)、高期待群の中で目標現実離隔群を高期待現状否定派(N=398)、低期待群の中で目標現実近接群を低期待現状肯定派(N=744)、低期待群の中で目標現実離隔群を低期待現状否定派(N=575)とした。

3 結果

1) 4タイプ別に見るきれいな女性でいることへの満足度

きれいな女性でいることの満足度について4つの現状認識タイプ(低期待現状肯定派、低期待現状否定派、高期待現状肯定派、高期待現状否定派)の平均値を図1に示した。

分散分析の結果、低期待現状否定派(2.61)よりも高期待現状肯定派(3.00)の方が値が有意に高かった($F = 20.00, p < .001$)。低期待現状肯定派(2.77)、高期待現状否定派(2.88)は低期待現状否定派や高期待現状肯定派の中間的な値をとっており、この2者との間に有意な差はみられなかった。



2) 4タイプ別加齢の受容度、若さへのこだわり度、アンチエイジング実践度

加齢に対する考えを問う3項目の平均値を4つの現状認識タイプ別に表1に示した。

加齢受容肯定度について分散分析を行なったところ、高期待現状否定派(2.69)よりも低期待現状肯定派(2.87)の方が値が有意に高かった($F = 4.52, p < .01$)。高期待現状肯定派(2.78)、低期待現状否定派(2.79)は高期待現状否定派や低期待現状肯定派の中間的な値をとっており、この2者との間に有意な差はみられなかった。

若さへのこだわり度について分散分析を行なったところ、低期待現状肯定派(1.86)や低期待現状否定派(1.86)よりも高期待現状肯定派(2.03)や高期待現状否定派(2.01)の方が値が有意に高かった($F = 22.38, p < .001$)。

アンチエイジング実践度について分散分析を行なったところ、低期待現状肯定派(2.72)や低期待現状否定派(2.70)よりも高期待現状肯定派(3.19)や高期待現状否定派(3.13)の方が値が有意に高かった($F = 74.41, p < .001$)。

表1 4タイプ別加齢認識度得点比較

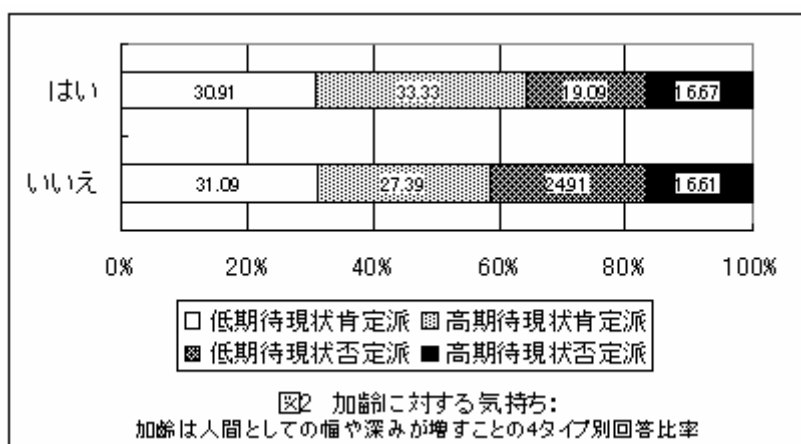
	低期待 現状肯定派	高期待 現状肯定派	低期待 現状否定派	高期待 現状否定派	F値
加齢受容肯定度	2.87 b	2.78 ab	2.79 ab	2.69 a	4.52 **
若さへのこだわり度	1.86 a	2.03 b	1.86 a	2.01 b	22.38 ***
アンチエイジング実践度	2.72 a	3.19 b	2.70 a	3.13 b	74.41 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

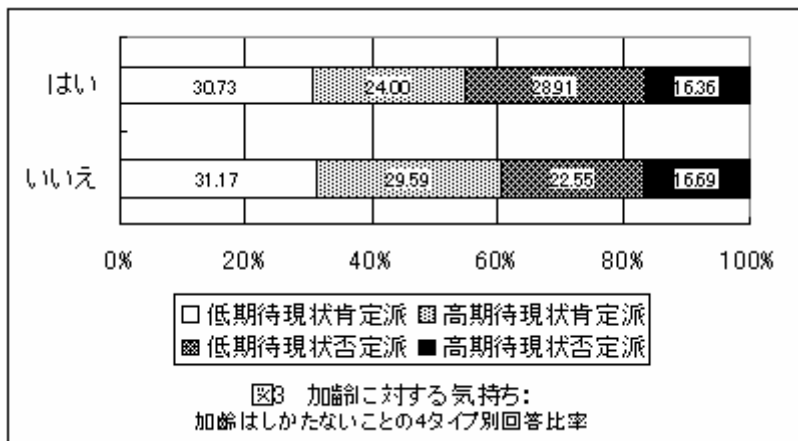
同じ行でアルファベットが異なる場合は、その間に統計的に有意な差がみられたことを示している

3) 加齢に対する気持ち、加齢ときれいさの関連について

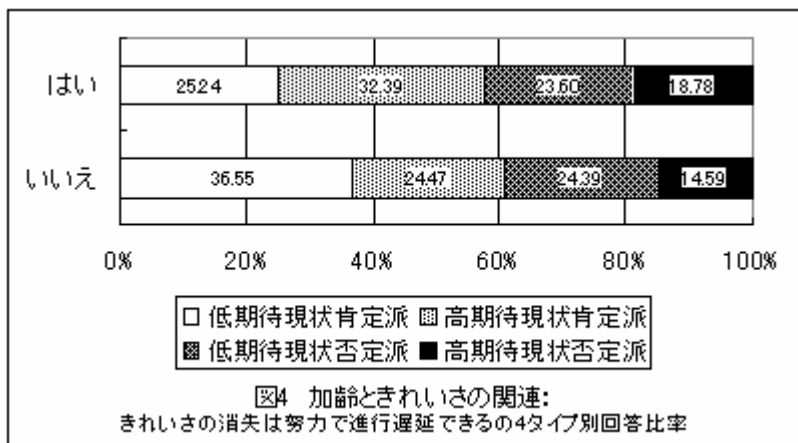
図2では、加齢に対する気持ちとして、加齢は人間としての幅や深みが増すことに対する回答結果を4タイプ毎に示した。加齢に対する気持ちの是非と4タイプの関連について²検定を行なったところ、有意な関連性が見られた($\chi^2 = 11.88, p < .01$)。



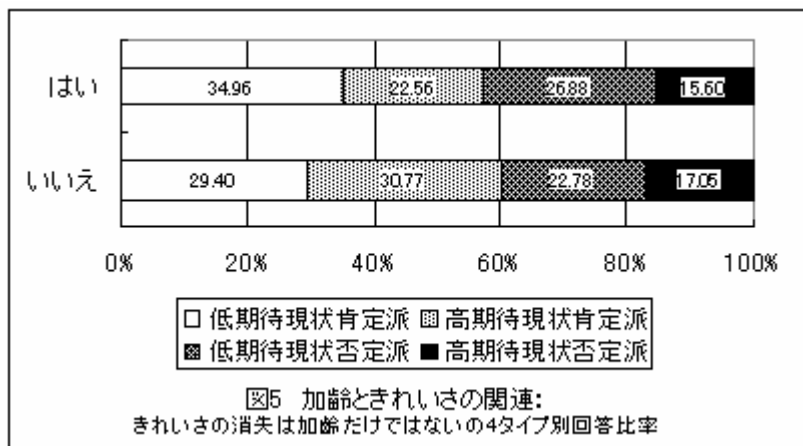
加齢に対する気持ちとして、加齢はしかたないことに対する回答結果を4タイプ毎に図3に示した。加齢に対する気持ちの是非と4タイプの関連について²検定を行なったところ、有意な関連性が見られた ($\chi^2 = 8.38, p < .05$)。



加齢ときれいさの関連として、きれいさの消失は努力で進行遅延できることに対する回答結果を4タイプ毎に図4に示した。加齢ときれいさの結びつきと4タイプの関連について²検定を行なったところ、有意な関連性が見られた ($\chi^2 = 44.34, p < .001$)。



加齢ときれいさの関連として、きれいさの消失は加齢だけではないに対する回答結果を 4 タイプ毎に図 5 に示した。加齢ときれいさの結びつきと 4 タイプの関連について χ^2 検定を行なったところ、有意な関連性が見られた ($\chi^2 = 21.13, p < .001$)。



本章では、美容行動における期待と結果の整合の観点から、仮説 1 は現状を肯定するほど満足感が高い、仮説 2 は現状肯定感が高い方が加齢を前向きに捉えたとした。この 2 点について検討する。

現状を肯定する状態とは、目標と現実の隔たりが小さく、結果として現実が目標に近づいた状態である。4 タイプ別きれいな女性でいることへの満足度得点を見ると、高期待現状肯定派の得点が最も高く、低期待現状否定派の得点が最も低い。高期待現状否定派と低期待現状肯定派は、低期待現状否定派や高期待現状肯定派の中間的な値をとるがこの 2 者間とは有意差がない。従って、期待が高い場合は現状肯定派の満足度得点が高いものの、期待が低い場合の満足度得点には有意差がないことから、仮説 1 は支持されない。

加齢を前向きに捉えることについて、加齢受容肯定度と加齢に対する気持ちの 2 項目を指標として用いている。4 タイプ別加齢受容肯定度得点を見ると、低期待現状肯定派の得点が最も高く、高期待現状否定派が最も低い。加齢に対する気持ちとして加齢は人間としての幅や深みを増すと回答した割合、加齢は仕方ないことと回答した割合の両方で有意な関連性があり、高期待現状肯定派では加齢を人間としての幅や深みが増すこととして受け止める割合が高く、しかたないことと考える割合が低い傾向がある。従って、現状肯定派では加齢を肯定的に受容し、しかたないことと思うのではなく、人間としての幅や深みが増すことと捉える傾向が高いことから、仮説 2 は支持された。

4 考察

1) 4 タイプ別に見るきれいな女性でいることへの満足度

期待と結果による 4 つのタイプの満足度得点を見ると、低期待現状否定派が最も低く、高期待現状肯定派の得点が最も高い。期待をかけて現状を肯定的に捉えられる状況のときに最も満足感が高くなることは十分に納得できる。低期待現状肯定派では、目標と現実が近い状態のときにかかる期待も小さいと、やさしい課題に力むことなく課題を達成したときのように、満足感や達成感が薄いのかもしれない。低期待現状否定の状況とは、期待は小さく、目標と現実の隔たりが大きい状況である。目標と現実が離れているから期待をかけないのか、期待をかけないからさらに離れるのか、この結果からは判断することはできない。その点を考慮した上で解釈するならば、目標と現実が離れていることから、目標に近づこうとする努力が成果につながりにくく、やっても無駄であるということを学習するために美容行動への動機づけが低くなり、その結果満足感に乏しい状況が生じていると思われる。

2) 加齢に対する受け止め方とアンチエイジング対策

加齢受容肯定度得点を見ると、低期待現状肯定派では加齢は自然なこととして受け止め、高期待現状否定派は加齢を避けたいと認識していることがわかる。加齢を人間としての幅や深みが増すこととして受け止める度合いが高く、しかたないことと考える度合いが低いのが高期待現状肯定派である。また低期待現状肯定派は、きれいさの消失はケアや努力で進行を遅らせられると認識する度合いが小さいことがわかる。若さへのこだわり度得点では、高期待派が積極的に若さにこだわり年を重ねたいとする一方で低期待派は若さにはこだわらず年を重ねたいと考える傾向がある。さらに、アンチエイジング実践度を見ると、高期待派は積極的にアンチエイジング対策に取り組みたいとするのに対し、低期待派ではアンチエイジングを好まずという回答になっている。加齢ときれいさの関連では、高期待現状肯定派ではきれいさの消失は努力で進行遅延できると考える度合いが高く、きれいさの消失は加齢による要因が大きいと考える傾向があるようだ。

これらの結果は、現状肯定感が高く期待も高い人が加齢を意識する傾向を示している。高期待現状肯定とは、期待をかけて、目標が現実に近づくことにより期待に見合う結果が得られたことで満足感が高まり、現状を肯定している状況であることがわかる。佐橋(2002)によると、日常の中で「何かをしなければならぬ」といった外発的動機づけより、「何かをしたいと思って行なう」内発的動機づけによる活動が多い方が、活動内容と関係なく一貫してより肯定的な感情が報告され、緊張の度合いが少なく、楽しさの感情と全般的な充足感を生むことが報告されている。また、個人の置かれている状況と個人が持つ能力や技術が均衡している場合、行為そのものや行為プロセスに没頭することで、注意の集中や自我忘却、不安からの開放などを体験しそれが内的報酬となりさらに挑戦的な活動に動機づけられると主張している。従って目標と現実が近い状態になって満足感を得ることが動機

づけとなり、さらに高い目標を設定して、もっときれいな女性になりたいと思って美容行動を続けるのではないかと推測する。齊藤(2001)は、「どうしたらきれいになれるのかは女性にとっての永遠不変のテーマである」として「きれいになるともっと先のきれいを追い求める。仮にきれいになっても人間には“老化”という残酷な運命が待っている。だから実現不可能な“若返り”を一生目指し続ける」と述べている。きれいになることの目標が若返りを目指すことに置かれるならば、加齢こそがきれいさ消失の主要因であるとして、きれいさを努力やケアで維持しようとする傾向が高くなるのも理解できる。

高期待現状肯定派の傾向を見ると、加齢に対して自然なこと、人としての深みや幅が増すこととして捉えるその一方で若さにこだわり、アンチエイジング対策に積極的という相容れない結果を示している。平山(2005)は2000年の資生堂とワコールによる「マチュア女性の意識に関する共同調査」の中で、「女性が成熟した女性としての美しさを感じさせるのは何歳か」という設問への回答の平均年齢は40.7歳という結果について以下のように解釈をしている。すなわち、フランスでは女性が最も美しいのは50代だという価値観があるのに対し、先の調査で日本における美しい成熟女性の年齢は40.7歳とかなり若い。フランスと日本とで美しい女性への価値観が異なる理由としてアンチエイジング医療を挙げ、その急速な発達年長女性の美という価値観や身体的な美しい年長女性像を豊かにしていくことを妨げかねないとするものである。また、美しさに対する多彩な情報によって年を重ねたなりの美しさを求めることが世間的に受容された結果、熟年における美しさ願望が強まり(川島 2003)、若いときには美容に無関心でも心身的、社会的にストレスフルな50代になると、個人にあったスキンケアやメイクに問題解決の糸口を求める人が増える(小林2003)という指摘もある。外見の変化がもたらす効用を利用して、加齢により生じるさまざまな問題に前向きに対処できれば、それは加齢に対する優れた危機対処法なのであろう。にもかかわらず、加齢の肯定的受容と若さの維持が共存する分析結果の背景には、長く強く健やかに年齢を重ねているワーキングウーマンのお手本が上の年代に少ないこと(対馬2003)、外見を磨くことに一生懸命になりすぎて自然に養われていくはずの内面の成長が手付かずにいること(齊藤 2001)などの要因が挙げられる。これらにより加齢の受容の方向性が定まらないままアンチエイジング技術が進展し、市場における美しさの方向が若さに決定づけられた結果とも考えられる。

佐橋の見解によると、期待をかけ現実が目標に近い人々は、置かれた状況の中でよい状態を求めて最大限の努力をする人々なのであろう。「足るを知る者は富めり」ということが、欲張らずに実現した結果に満足することと解釈するならば、無理して手に入れるものではなく、日々の積み重ねが形になりそれに満足することだと考える。さまざまな領域の女性に対して、外見のきれいさのみならず、辛苦の経験が生み出す鷹揚のある美しさが社会から求められ受容されると、美しい女性に対する価値観が多面的になり、日々の積み重ねが自然で価値あるものとして現状に満足する人が増えると思われる。

3) 今回の分析における問題点と二次分析への今後の展望

本章では満足度の測定に際して期待と結果の整合の観点から分析を行なった。期待として用いた変数は1ヶ月の美容投資金額であり、結果に用いたのは目標得点である「イメージするきれいな女性」として選択した項目合計数と現実得点である「目指しているきれいな女性」として選択した項目合計数の差の量である。期待とは、一般的にある事柄が将来実現すると心待ちにすること(社会心理学用語辞典 1987)、ある行為が一定の結果をもたらす可能性が大きいと認知し願望すること(社会心理学小辞典 1994)である。前者によると期待をかけることが投資することにつながる場合もあるかもしれない。後者に基づいて解釈すると、期待とは何らかの働きかけや処遇により得られる結果を認識したり願望することとして理解できる。すなわち、さまざまな美容行動を実践することがきれいな女性でいるという結果をもたらす可能性があるであろうということが期待であるならば、さまざまな美容行動にどれだけの金額を費やしたのかということで期待の大きさを測定することができる。そして、満足感が期待と結果の整合ならば、「このようになりたいという願いにどれだけ近づいたのか」の測定には、目標と現実の隔たりの程度を結果とみなすことができると考える。そこで、目標得点である「イメージするきれいな女性」として選択した項目合計数と現実得点である「目指しているきれいな女性」として選択した項目合計数の差を目標と現実の隔たりとして用いている。さらに、これらの要因をもとに、「このようになりたい」という欲求をどの程度抑えて現実と折り合いをつけているのか、個人の置かれた状況を自分はどう認識するのかなどの違いから、加齢に対する認識も異なると考え、期待および目標と現実の隔たりの程度から4つの現状認識タイプに分類して加齢の認識やアンチエイジング対策などを分析している。

今回の分析に際して、結果に用いた目標得点、現実得点はともに項目の総和であること、その差を目標と現実の隔たりとしたことなどいくつか分析上の問題がある。すなわち、項目を加算することの手続きを省いている点、また、いずれも総和を求めてからその差を算出している点である。ポーラ文化研究所の「現代女性の美しさへの意識」調査(2007)によれば「イメージするきれいな女性」と「目指しているきれいな女性」を構成する項目は、外見、顔、ファッション、ボディ、内面など広範囲にわたることが示されている。項目の加算に際して、これら全ての項目が測定しているものがひとつの要因であることを確認していないため、多岐にわたる要因を単一で論じている可能性は否定できない。また、ある回答者が「イメージするきれいな女性」として選択した項目と「目指しているきれいな女性」として選択した項目が異なっていたとしても、各々選択した個数が同じであれば、その差はゼロとなり、その回答者は目標現実近接群として分類している。イメージするきれいな女性として選ばれたが目指しているきれいな女性では選ばれない項目、目指しているきれいな女性では選ばれたが、イメージするきれいな女性では選ばれない項目がそれぞれ何を意味するのかを分析し解釈することで、女性の美しさに対する回答者の実像を忠実に反映できると考える。

引用文献

- 大坊郁夫 1996 化粧心理学の動向 高木修(監) 被服と化粧の社会心理学 北大路書房
Pp.28-46 .
- 古畑和孝編著 1994 社会心理学小辞典 有斐閣 .
- 平山満紀 2005 現代女性の身体と加齢意識(美の時間軸 - 時とともにあるわたし)化粧文化, 45, 37 - 41 .
- 川島蓉子 2003 “美しさ”求めるミドルエイジのファッション意識(特集1 アンチエイジングの時代)化粧文化, 43, 20 - 25 .
- 小林浩明(訳) 1996 フロー体験:喜びの現象学 世界思想社 .
- 小林環樹訳 1997 老子 中公文庫 .
- 小林照子 2003 若くなった50代が美容を変える(特集1 アンチエイジングの時代)化粧文化, 43, 46 - 51 .
- 厚生労働省ホームページ 日本人の平均余命 平成19年簡易生命表
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life07/01.html> (2009年1月30日) .
- ポーラ文化研究所 2007 「現代女性の美しさへの意識」調査 ~「きれいな女性」志向について~ .
- ポーラ文化研究所 2007 「現代女性の美しさへの意識」調査 ~エイジング意識について~ .
- 余語真夫・浜治世・津田兼六・鈴木ゆかり・互惠子 1990 女性の精神的健康に与える化粧の効用 健康心理学研究, 3, 28 - 32 .
- 松井豊・山本真理子・岩男寿美子 1983 化粧の心理的効用 マーケティング・リサーチ, 21, 30 - 41 .
- 永尾松夫 1983 女性における化粧意識 化粧文化, 8, 133 - 144 .
- 成実弘至 2003 美しいからだはここを癒す(特集1 アンチエイジングの時代) 化粧文化, 43, 25 - 31 .
- 小川和夫監修 1987 改訂新版 社会心理学用語辞典 北大路書房 .
- 佐橋由美 2002 日常経験における動機づけの検討 - 40・50代既婚女性を対象として - 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 1, 1 - 17 .
- 斉藤薫 2001 美容は女性たちに何を教えたのか 化粧文化, 41, 6 - 12 .
- 境野勝悟 2008 道元「禅」の言葉 三笠書房 .
- 総務省統計局ホームページ 人口推計月報
<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/tsuki/index.htm> (2009年1月30日) .
- 鈴木由加里 2006 女は見た目が10割 誰のために化粧するのか 平凡社新書 .
- 対馬ルリ子 2003 アンチエイジング美容が女性にもたらしたもの(特集1 アンチエイジングの時代)化粧文化, 43, 32 - 37 .
- 余語真夫 1996 化粧と心理学的ストレス フレグランスジャーナル11月号, 54 - 61 .